

## Part II

# 世界の子どもたち

本シリーズは、フォトグラファー中西あゆみさんが「世界の子どもの生活とあそびの今」をタイムリーにレポートします。

写真・文 中西あゆみ

## リサイクル村



インドネシア

前号では、ラマダン中に寄付を待つ若い夫婦のことを紹介しました。夫と妊婦の妻は、資源ゴミが一杯に詰まった大きなゴミ箱のなかに幼い子ども二人を入れてあやしています。日中はゴミ収集。夕方、一家はゴミ箱とともに道路沿いに立ち、誰かが立ち止まって何かを恵んでくれるのを、ただじっと待っています……。ゴミ箱を目印に寄付先を探す人々と、ゴミ箱に入り寄付を待つ人々の光景。異様な状況に聞こえるかも知れませんが、ラマダン中のジャカルタでは珍しくありません。本来イスラムの教えではシェアをする精神が大事にされています。恵まれている人が恵まれていない人を助けるのは当然ということですが、日頃、選挙活動以外で、富裕層が自ら貧困層を助けるという話はあまり聞きません。「ラマダン中に許しを請うため、この数日間だけ他人に優しくなるんだ」。そんな言葉がささやかれます。貧困がマジリテイを占める現状。いまだ富の不公平がまかり通っている印象が拭えません。

インドネシアでは、個人の責任でゴミを持ち帰ったり、分別して再利用しようという意識が低く、道路でも電車のなかでもポイ捨てが横行しています。とくに



1. 資源ゴミを集め生計を立てる「リサイクル村」の人々と子どもたち。南ジャカルタ・チランタック地区。  
2. レース鳩を育てるため、鳩を飼う「リサイクル村」の少年たち。  
3. 村の真ん中にある共同井戸水で水浴びと洗濯。





罪悪感もないようです。捨てる人がいて、拾う人がいます。大きな布袋をかかえ、資源ゴミを拾って歩く人々の姿はよく目にします。ゴミ収集者の多くは、ジャワ島の中部地方から出稼ぎに来た人たちとその家族。村ごと総出で来ることもあるそうです。しかし生活は安定せず、妊婦も子どもたちも厳しい暮らしを強いられます。短期滞在のものが、故郷に帰ることができないまま何年も同じ暮らしを続ける人がたくさんいます。

南ジャカルタ・チランダック地区の山の手に、高級住宅街が広がっています。その裏側に続く谷の底、通称「リサイクル村」には、20世帯が暮らしています。ゴミ収集で出稼ぎをするためにジャワ中部の同じ村から出て来ました。10才以下の子どもは50人近くもいますが、学校に通っている子はいません。皆親を手伝い、一緒にゴミを集める毎日。女性たちは赤ちゃんを抱きかかえ、日中35度にもなるなか、お屋敷街を一日歩き回って布袋にゴミを集めます。裸足で働く少年もいます。列をなして歩く彼らを、高級車が次々と追いつ越して行きます。

3年前からこの村を取り仕切っているのはスピヨ夫妻。出稼ぎに来たものの、路頭に迷っていた労働者家族らに住居を提供し、仕分けされた資源ゴミを業者に売る仲買人をしています。2週間毎に一家族が夫妻から受け取る報酬は100万ルピア(約1万円)。かならず収入が入る保証はありません。谷底のような地形の底辺部分に位置するこの村を、雨期になる度に洪水が襲います。

ジャカルタにはこのような「リサイクル村」がいくつも点在しています。たいていはお屋敷街の裏手。資源ゴミが多く捨てられる高級住宅街の近くに集団でスラムをつくっています。夜8時過ぎ、南ジャカルタ、パサール・ミング通り沿いにあるコンビニ前に子どもたちが座り込んでいます。3人と4人のグループは、別々のリサイクル村から来ていました。コンビニの外に設けられたテーブル席では、買い物客が思い思いの時間を過ごしています。

子どもたちに目を留める人はいません。お客が帰った後、食べ残しやペットボトルが、静かにリサイクルされていきました。



©Sameer Al-Abdullah

**中西あゆみ**

フォトグラファー

東京出身。米国でフォトジャーナリズムを学ぶ。2010年よりインドネシアのジャカルタを拠点に活動。長編ドキュメンタリー映画を制作中。



4

4. チランダック地区にある小さな村。通称「リサイクル村」では、村人によって資源ゴミが集められ、分別される。5. チランダック地区の高級住宅街を歩き、資源ゴミを収集する「リサイクル村」の人々。6. コンビニの前に座り込み、資源ゴミ収集のチャンス待ち子どもたち。南ジャカルタ、パサール・ミング通り沿い。



6



5